

吃音（どもり）の改善 男性 55歳

小学生の頃から始まって高校の時に民謡を習って、かなり改善した。

新潟県出身の人で田中角栄も吃音があって民謡で治したそうだ。

現在は普通に話をする、ほとんどどもらないが、た・ち・つ・て・との、特に「つ」と「て」で始まる言葉でどもる。

治療の前に「たちつてと」を発音させて録音した。

中医学の五行の五声に、心は「言」（げん、しゃべる）に関係が深いと説明している。

筆者の経験上、吃音は心の弱りが原因で、舌の動きに滑らかに動かないために起ると考えられる。

〔背臥位〕

・テスト

舌を奥に押し込んで、そのまま左右に動かして舌の奥の力の入り具合を調べる。

舌を上巻き上げる、下巻き下げる。（図1）（患者は男性であるが写真は女性）

この動作を行わせると、舌を上巻き上げた時に、舌の左側に動かしにくい感覚があった。

〔背臥位〕

1. 診断按摩

胸部の腎経・歩廊穴を左右同時に指圧（図2）すると、左側のツボに圧痛が強かった。

左上肢の心経・少海穴を持続圧（図3）しながら、舌を巻き上げさせると、左側の動かしにくい感覚が軽減した。

また舌を押し込むと舌の奥の筋の感覚が滑らかになった。



（図1）



（図2）



（図3）

しかし試しに心包経の曲沢穴を指圧すると、このツボの方が少海穴よりも硬結・圧痛が強かった。曲沢穴を持続圧（図4）しながら、もう一度舌を動かすようにさせると、心のツボよりも舌の感覚が良くなった。

それではと考えると、歩廊穴の上の神封穴を指圧すると激痛があって、痛みのあまり身をよじらせる動作をした。

神封穴と曲沢穴を持続圧（図5）しながら、舌の巻き上げと奥への押し込みを行うと、心のツボを指圧した特よりも滑らかに動かすことができた。

最初は激痛を感じていたが1分間を過ぎるころから圧痛が軽減してきた。



(図4)



(図5)



(図6)

〔腹臥位〕

左肩甲間部に診断按摩を行うと外厥陰腧穴（図6）に硬結・圧痛があった。

このツボを重ね母指圧を行いながら、舌を巻き上げて、奥に押し込むようにさせると、滑らかに
行うことができた。

3分間の持続圧を2回行った。

〔坐位〕

座って「たちつてと」を言わせると声が大きくなって、たちつてとの発音がはっきりした発音に
なっていた。

患者さんはクリスチャンで、教会で「天にまします・・・」を言う時に「て」が出ないというの
で、今度教会に行つて発音して改善しているかどうかを観察するように説明した。

ゴーヤ（図7）を心包経のツボに置いて呼吸と O-リングテストを行うと、呼吸が楽にできて中
指の力が強くなり、舌の動きが良くなった。（図8）



(図7)



(図8)